



図143 菖蒲塚古墳から見た多宝山・弥彦山

菖蒲塚古墳経塚 西蒲区竹野町

経塚とは、経典を銅製の容器（経筒）などに入れて土の中に埋めた塚のことである。平安時代の中ごろ、仏教の教え（仏法）が衰えて戦乱の世になるという末法思想が流行した。人々は寺や仏像を造ったり、経典を後世に伝えるために土の中に埋めたりして、仏法の再興を願った。経塚は、ほぼ全国的に分布し、多くは当時霊地や霊山として信仰の対象となっていた場所にある。

菖蒲塚古墳経塚の遺物は、菖蒲塚古墳（五二ページ）の後円部から出土した。古墳の麓にある金仙寺が、江戸時代に発掘して発見したものである。この時、古墳時代の管玉類も出土していることから、経塚は古墳の埋葬施設の近くにあったのであろう。現存する遺物は、経典を入れるための銅製の経筒が二点、珠洲焼の壺が二点のほか、和鏡五面、中国製青白磁の小壺と合子が各一点である。

図一四五の左の経筒には、嘉応二（一一七〇）年の年号や、「如法経供養」と、藤原正宗・草加部氏なる人名が刻まれている。図の右の経筒には、享祿三（一五三〇）年の年号や、下野国大内庄厚木（現栃木県芳賀郡二宮町付近）の住人一八人が経筒の埋納を依頼したことなどが刻まれている。二つの経筒の年代が大きく異なることから、経塚は少なくとも二回にわたって



図144 和鏡 左, 山吹双鳥鏡, 直径11.5センチメートル 右, 菊花双鳥鏡, 直径10.4センチメートル 金仙寺所蔵



図146 珠洲焼の壺
高さ36センチメートル
金仙寺所蔵

う。
も関係しているであ
る。
は、昭和三十七(一九六二)
年に国の文化財に指定され
ている。

菖蒲塚古墳経塚の出土品



図145 経筒 金仙寺所蔵

以降の経塚では、副納品や外容器に
経筒を納める例が少なくなることか
ら、享禄三年の経筒は単体で埋納さ
れていた可能性もあろう。

この場所が聖地とされたのは、新
潟県最大の前方後円墳である菖蒲塚
古墳の存在とともに、神の山として
知られる弥彦山を望む絶好地である
ことも関係しているであ

造られたことが分かる。なお、珠洲焼の壺や鏡、青白磁製品が、経筒の外容器や副納品であつたのかは不明であるが、いずれも嘉応二年の経筒に近い年代と推定される。全国的に十六世紀